

第58号

平成17 (2005) 年12月15日

広島市中区国泰寺町1丁目2番49号
〒730-0042 広島国泰寺高等学校内

鯉 城 同 窓 会

電話 (082) 241-9777

FAX (082) 248-7341

E-mail rjo@orion.ocn.ne.jp

鯉 城



「追憶之碑」前で手を合わせる伊東秋男
さん(右)と二男の次男さん夫妻
(7月24日、国泰寺高で)＝中国新聞提供

『星は見ている』を復刊

一方、母校では恒例の原爆死
没者慰霊祭が7月24日「追憶之
碑」の前に遺族ら三百五十人が
集まって、しめやかに行なわれ
た。今から五十二年前、犠牲に
なった生徒たちの遺族が残した
親たちの手記「星は見ている」
を復刊したことが遺族会から報
告された。しかし、この日参加
した親は僅かに四人。親の世代
はほとんどが九十歳を超え、す
でに亡くなられた人、高齢のた
め出席できない人も多く、六十

碑前に額づく老父

「追憶之碑」前で慰霊祭 遺族ら三百五十人が参列

あの日から六十年。今年の広島は節目の年ということもあつて、春から秋にかけて、平和を希求するさまざまなイベントが催された。特に市や民間の主催する大型の音楽イベントが相次ぎ、8月には平和公園を中心に二日間にわたって国内外から有名アーティストが参加した大がかりなコンサート、10月には世界的な指揮者の小沢征爾さんが、文化勲章の日野原重明さん、女優の吉永小百合さんとともに参加した。広島と東京の市民コーラスと小沢オーケストラによるフォーレの「レクイエム」が演奏され、音楽と詩の朗読による「世界における平和のメッセージ」を広島の人から発信した。会場の八千人の市民は大きな感動に包まれながら平和への祈りを新たにしました。

節目の年 世界に届け広島の祈り

年の歳月の重みを感じさせた。
その四人の出席者の中に伊東秋男さん(九四)の姿があった。伊東さんは「節目の年なので無理を押しして」と二男の次男さん(六八)夫妻に付き添われて追憶之碑の前で静かに手を合わせながら当時十二歳の長男さんの幼い顔が目に残っていたのだらう。

伊東さんは六十年前に宏さんを失い、四年前には次男さんの長男和重さん(三五)＝当時＝を、ニューヨークの世界貿易センタービルを襲った「9・11同時多発テロ」で失うという二重の大きな悲しみを被った人でもある。

この日、碑の前で次男さん夫妻に支えられて手を合わせる秋男さん。二世代にわたって戦争とテロに打ちのめされた遺族の悲しい姿があった。二年前、中国新聞は伊東さんの家族の悲劇を取り上げ、「二つのグラウン・ド・ゼロ、兄・子を奪った究極の暴力」というタイトルで報じ、加害者のいわれのない暴力を告発している。



広島一中卒業60周年 記念文集「ユーカーリ」刊行

昭和 19 年卒

綴られた様々な人生 同期生 78 人が寄稿



卒業60周年を記念して
発刊した
文集「ユーカーリ」

昭和十九年に旧制広島一中を卒業した同期生で結成している「一九会」は昨年10月、会員から募集した原稿をまとめて、文集「ユーカーリ」を刊行した。

これは平成十五年に開いた同期会で中村好之君が提案し、会員の皆さんの賛同を得て、翌年秋に開いた「広島一中卒業60周年クラス会」の記念事業として取り組んだ。文集編集はクラス会世話人会（代表・隅田正三君）が役割りを分担し、編集方針、仕様、費用など一つ一つを世話

原稿を依頼したのは死亡者を除き所在のわかつている百四十五人で、応募は予想をはるかに超え、七十八人に達した。思わぬ反響に世話人一同嬉しい限りであり、張り合いを感じながら刊行に向けて大きなパワーになった。

内容は当然のことながら、広島一中時代の思い出が七割を占め、その他随想、近況、旅行記などとなっている。それに年表と当時のスナップ写真を加えて文集らしく仕上がった。

底流に脈打つ、「中賛歌」

「入学60周年記念文集」上梓

昭和 24 年卒

今年八月、われわれ広島一中有終会「昭和二十四年卒」は、入学六十周年記念文集「続・鯉城の日々」を上梓した。松浦道一、川村毅両先生にもご寄稿をお願いし、会員七十七名が筆をとってくれた。

「続」としたのは、すでに昭和六十一年八月、最初の回想録『鯉城の日々』を刊行しており、今回はいわばその続編といった意味合いもあるからだだが、それにしても何故、卒業五十五周年記念ではなく、入学六十周年記念なのか、詳しくは「あとがき」をお読みいただくとして、要するに、われわれは戦後の学制改革によって、ともに

広島一中を卒業させてもらえなかった世代である。まず二十三年の学制改革で広島一中は鯉城高校に衣替えしたのも束の間、翌二十四年の改革第二弾は、さ

も脈々と生きている。良き師、良き友に恵まれ、幸運であった。「ユーカーリ」（B5版、268頁）はその級友の心に残る一冊である。現在残部は若干残っている程度。同窓会事務局にも一冊保存している。

（昭和19年卒 藤田 勝）

右の者は本校において定められた課程を修了したことを證する

昭和二十四年三月二十日
広島県立広島第一中学校長
数田 猛雄

と明記した卒業證書を交付してもらったことであろう。そのいきさつについては、文集の第二部「鯉城高校物語」の中（三百四十六頁～三百四十七頁）

われわれ同期に共通する信条でもある。

（昭和24年卒幹事 福岡駿吉）

やさしい贈り物

昭和34年3年5組
昭和34年卒業の三年五組の級友は8月21日、五回目のクラス会を広島プリンスホテルで開いた。今年には女性二人と男性十五人が参加。六十五歳を記念して世話人の伊藤君が出身地の熊野の化粧筆を全員にプレゼント。男性は奥様への贈物にと彼の優しさが伝わった。

（堂垣内崇雅 広島市在住）

決勝

観音2（1-1-10）1皆実

沖田監督の話 県新人戦優勝に始まり、中国プリンスリーグ六位、県総体三位、いよいよ最後の選手権大会。狙うは優勝。苦しい試合の連続で、逆にチームの結束が強くなり、迫り着いた準決勝であったが、またしても決勝の前に涙を吞んだ。多くの方に支えて頂き、選手もそれに応えようと全力を尽くしたが、残念であった。

一、二年生には、今年流した涙を忘れないで、さらに飛躍してもらいたい。

立川主将の話 悔しい思いもありますが、三年間、国泰寺の

で、当時の校友会理事・今田耕二君が詳しく書いています。実に貴重な証言だ。

それにしても戦中戦後のあの多難な時期に、広島一中生活を共にした仲間たち、構成メンバーの実態は複雑である。原爆―終戦を挟んで、運命的とも言える学徒動員のこと、学制改革の嵐に翻弄されたことなどあって、卒業年を基準とした世間一般の同期会とは異なり、中途で転出入した者すべてを包含しているからだ。あるいは原爆で親を失い親戚を頼って転じたケース、学業そのものをあきらめたケースもある。また、戦火を逃れて疎開した広島で原爆に遭遇、終戦で再び出身地に戻ったケースなど様々だが、たとえ一時的ではあっても、あの戦争体験を共有したわれわれの同士のつながりは終生大事にしたいし、そうした仲間からのこのたびの投稿は本当に懐しかったし、嬉しかった。

三年制の現在の新制中学―新制高校に学んだ後輩諸君が、旧制中学を回想するこの記念文集をどうぞご覧になるか見当もつかないが、ただ一つ、広島一中に對するわれわれの愛着の強さといったものが行間全体から滲み出ていることを、いささかなりともお感じ取りいただければ、と願っている。

（福岡 駿吉）

副社長の話に感動 今年も先輩の職場訪問

総合的な学習時間の活用で一年生二百三十五人が去る10月5日から三日間、三十一組に分かれて広島市内を中心に先輩たちが働いている職場二十九事業所を見学した。同月26日には職場見学の報告が開かれ、土井敬正母校振興委員長と桑野恭彬事務局長が出席し、参加者から見学の成果を聞いた。

各事業所の先輩方の対応は、母校の生徒に対する期待がこもっており、生徒の心に強く焼き付けられたようである。報告内容は、二分以内の制限の中で率直な感想が述べられた。訪問先の副社長と会って「お話を聞いただけでも感動した」というスーパージニアーズ組や、介助する方も、される方も、笑顔の大切さを感じ、これからの進路を考える上で活かしていきたい」と感じたヘルパーステーションふじ組など大きな成果を上げた。多忙な中を対応して頂いた各事業所の先輩方に、同窓会としてもあらためて感謝の意を表します。

放送部が全国優勝

全国文化祭
A P 部門

二連覇の快挙



400回で千秋楽
有終会の
ゴルフ会

広島一中有終会「昭和24年卒」の第四百回ゴルフ例会は10月22日、宮島志和カンツリー倶楽部で生憎の強い北風を衝いて参加十四人が記念すべきファイナルラウンドを完走した。写真。そして夜の打ち上げはリーガロイヤルホテル広島三十二階のエメラルドの間に、元会員も含む総勢二十六人が集い、十人を数える物故会員の住時など偲びながら歓を尽したことである。

週れば昭和42年の二回開催を嚆矢（こうし）とし、四年半

第29回全国高等学校総合文化祭放送文化部門全国大会が7月30、31日の二日間、青森県三沢市の三沢公会堂で開かれた。国泰寺高放送部はアナウンス部門とオーディオ・ビクチュア（A P）部門に出場。A P部門で見事最優秀賞を受賞した。これは昨年の徳島大会に続く二連覇で全国でもあまり例がない快挙である。

作品は広島市内のホームレスの人々を支援している女性のドキュメントで、生徒自らボランティアを続け、約二年間をか

けて制作した。他校の生徒・顧問の先生から「感動した」の声が寄せられたほか、審査員の講評でも、制作段階の努力や作品の完成度が高く評価された。制作責任者の三年樽谷寛子さんは「リハールするとき音が小さかったの、だめかと思ったが、諦めずに調整を頼んだのがよかった」と話していた。

また放送部はこの受賞によって、8月25日に「広島県メーブル賞」も受賞した。部員たちは副賞の「青森の美しいリング」



昭和14年から18年卒の最年長組。二木会の常連の顔も見える若々しいテーブル。



昭和22年卒。立石、河面、木本と戦後の中スポーツを支えた人たちの顔も見える。



昭和26年卒。原爆の生き残りや地区制で共学になった級友、今年は全部で27人集合。



昭和34年卒組。リタイアして数年、第二の人生楽しんでます。



「楽しかったなア」新入り組も背広姿で二気嫌

熱気あふれる総会場。手前のテーブルに新入会員の顔が見える。



母校の現状を熱っぽく語る安森校長。この姿も今年限りか。

熱いエールで一体感 平成17年度 鯉城同窓会総会 会場揺るがす「鯉城の夕」

今年度の総会は七百人という多くの同窓生のご参加をいただき、また多額の広告協賛をいただき、誠に有難うございました。母校との交流ということで、昨年に続き母校の生徒の代表を会場に招き、彼らの活躍ぶりや成果を同窓生の皆様に直接ご紹介いたしました。特に今年は現役の応援団による演舞を行い会場より拍手喝采を浴びておりました。同窓生が現在の母校を共有し、若き後輩たちの活躍に対して、熱いエールを送る姿は、そこに新たな一体感を生み出し、母校と同窓会のさらなる発展につながるものと確信しています。

最後の「鯉城の夕」合唱で、時代や年代を超えて鯉城の旗の下、参加者が一体になったと思います。当番幹事という素晴らしい機会をいただき、御協力をいただきましたことに感謝とお礼を申し上げます。大切なご縁をいただき、歴史と伝統ある一中、国泰寺の絆を認識し、そして大変勉強させていただきましたと思います。今後の母校と鯉城同窓会のますますの発展を祈念し、昭和五十八年卒の次期当番幹事の皆さんにバトンタッチしたいと思います。本当に有難うございました。



代表幹事 石崎 幸弘



晴れて先輩の仲間入り。24年後の当番幹事誕生。

本年度の当番幹事は昭和五十七年卒業の私たちが務めさせていただいております。さて、近年の母校は二〇〇四年より開始された「ニューフェニックスプロジェクト」のもと、「スーパースাইエンスハイスクール」の指定をはじめ、各クラブの活躍等、文武両面にわたって飛躍的な発展を遂げています。二木会や総会において田村会長や安森校長から、母校の近況についてお話をいただくことも会の楽しみの一つになっています。

このたび、卒業して二十四年目に「国泰寺高校昭和五十七年卒業」という絆で結ばれた同期が集い、同窓会の活動に参加することで、あらためて母校の歴史や同窓会活動について理解し、すばらしい同窓の方々とのご縁をいただくことで、私たちも「母校のために」という気持ちで、総会の成功に向けて取り組むことができたのではないかと思います。



現役応援団から同窓会の先輩に熱い応援のプレゼント



先輩応援団から母校の活躍に力いっぱいのエール



田村会長から顕賞状を受ける叙勲など各種賞を受けた人たち。会長自身もその一人。



昭和20年卒。今年は同期が集い卒業60年を祝った。凛々とした調子顧問の顔もある。



昭和29年卒。卒業して51年ものたつ、さすがの敏腕社長さんも穏やかな好好爺。



昭和42年卒。卒業して38年。職場のリーダーの奮闘気が漲る。ゴールまで頑張ろう。



「あア、終わったネ」退席する皆さんを拍手で見送る当番幹事の女性たち

田村会長ら8人を顕彰

今年度の各種賞受賞者

平成十七年度、各種の賞を受章された同窓生の方々を同窓会総会で顕彰した。顕彰された方々は次のとおり。

《叙勲関係》

瑞宝中綬章（教育研究）昭和19年卒 徳岡昭治▽瑞宝中綬章（教育研究）昭和20年卒 横路謙次郎▽旭日小綬章（金融業務）昭和25年卒 田村鋭治▽瑞宝重光章（工業技術の発展）昭和27年卒 石原舜三▽瑞宝双光章（郵政事業）昭和24年併中卒 大多和 孝▽瑞宝双光章（地方自治）昭和28年卒 花岡 哲

《高松宮殿下記念世界文化賞》

昭和32年卒 三宅 一生

《平成17年中国文化賞》

昭和25年卒 平位 剛

《平成16年日本善行会表彰》

旧職員 石川幸子

あすの日本を

憂う声しきり

東京鯉城23年卒

われわれは昭和十八年から二十四年の六年間に、ある期間国泰寺の学び舎で同学年として籍を置いた仲間である。昨年に

している。そして県人会の中に関西同窓協議会を組織して交流を図っている。特に、広商、広陵、瀬戸内、如水館など甲子園常連校、毎年年末京都で行なわれる全国高校駅伝で名を馳せた

関西鯉城同窓会設立の動き

大阪で関西鯉城同窓会を設立する動きが始まっている。近畿広島県人会の巻幡展男会長（関西テレビ会長）は昭和二十二年の広島一中の卒業。前会長の井上義國氏（ダイキン顧問）も昭和二十三年の卒業

生である。ところが一中OBが二代続いた、会長の母校の同窓会組織が関西には存在しない状態が続いている。

世羅高など、応援に力を入る同窓会支部が名を連ねているという。県人会の中では「県内一番の名門校の同窓会が関西にないのは不思議だ」という人もあるそうだ。

こうした声もあつてか、一部

続き、奥武蔵自然公園にある「あじさい館」で、5月29・30日の両日、同期会を開いた。

ホテル周辺の新緑が、屏風絵のように連なる山々の濃い緑に映えて美しかった。

長年、高級レストランで会合していたところ、もう少し時間が欲しいという声が上ががり、織田君の世話で一泊二日の「わいがや」会を始めて二回目である。重松君の上京スケジュールに合わせて計画が立てられるのが恒例となつていくが、今回は当日配布されたレジュメの盛り沢山には驚かされた。①各人の近況紹介②今岡君の海外（ウルグアイ）ボランティア活動の話③佐野君のM&A談義④重松君のワールドカップサッカー談義⑤最近国

の同窓生の間でも「何とかなくしては」との声が始め、関西での同窓会設立の気運が盛り上がるようになっている。近く準備委員会を立ち上げ、関西在住の同窓生に設立を呼びかけることにしている。同窓会

としても早期実現を期待している。

この件についてのお問い合わせは近畿広島県人会の大津（旧姓宗藤）巧副幹事長（昭和39年定卒・八尾市北亀井町三―一二四、電話0729・92・0812）まで。

内外の諸問題に関する懇談などである。

巧みに話す演者の講話を最初のうちは静聴していたが、質疑応答の中断を境にして、談論風発し始め、誰が講演しているのか解らなくなるほど盛り上がりをつけた。講演者三名、幹事二名を含む十七名のグループ活動は、老人の集まりとしては、とても想像できない活発なものであった。予定時間を大幅に超え、大広間での宴会へも話題は持ち越され、最後は幹事部屋に移って真夜中まで続いた。翌朝、好評を博している重松君の野球・サッカー談義を楽しみながらも、世界に伍していくためには14・16歳をピークとした若人の養成が肝要だと説かれ、国の現状を憤り、明日の日本を憂う声は治まらないようであった。いつの間にか時も過ぎ「鯉城の夕」合唱の機会を持てないまま帰路のバスの人となった。

（三崎 俊明）

事務局通信

▽原紺さん、校歌の書を寄贈

昭和三十七年卒業の書道家原紺通子さんが、今年四月に東京都内で開催された「第七回公華展」と併せて催された「原紺の華の書の世界」に出展した作品を、このほど母校国泰寺高校へ寄贈したいとの申し入れがあ

り、学校側も喜んで受け入れることになった。

作品は国泰寺高校の校歌「さみどり匂う太田川」全文を九張の軸に仕立てた堂々たるもので、在校生の書道教育の糧にしたいと、学校も喜んでい

▽還つてきた一中連絡簿

10月27日、スラリとした紳士が同窓会室へお見えになった。昭和二十年入学の一年生、十四学級廣澤先生クラスの工藤徹さん。一カ月だけ在校、5月に父親の転勤で福山へ転校。危うく原爆の被害を免かれたそう。六十年ぶりの来訪である。

これまで保管していた「連絡簿」「入試受付票」「受験票」を同窓会へ寄贈して帰られた。

「連絡簿」は願出・届出事項を学校から許可をもらうために使用するものである。「市内電車ハ病氣ノトキ許可」とある。郊外からの通学生は、広島駅、己斐駅、横川駅から歩いてきた

とのこと。「自轉車通学ハ學校ヨリ約五軒以内ハ不許可」とある。学校より約5kmを越える道の程の者だけ自転車利用が認められたとのこと。工藤さんも皆実町の自宅から片道2.6kmを毎日徒歩通学したそうである。当時の質実剛健の実態が忍ばれる。工藤さんは一中慰霊碑に参拝、原爆直後の様子を写した銅版を感慨深く眺めていた。